
(株) 秘密結社

イオン水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

(株)秘密結社

【Nコード】

N0164Y

【作者名】

イオン水

【あらすじ】

今まで何事も無く普通に生きてきた。少なくとも僕はそのつもりだ。
18歳の誕生日の日、父の後をついで秘密結社の2代目総統に就任した。幼馴染2人は女幹部！？いやちよつと待って。ネタなんだよね？

1 にちめ 「秘密結社」(前書き)

主人公が秘密結社の総統になり活動します。ユルイ感じですがシリ
アスに向かつて行く予定です。あくまでも予定です。こちらは気が
向いたときに続きを書きます。向かなければ残念と言つ事で。

1にちめ 「秘密結社」

誰しも幼馴染の一人や二人は居るはずだ。僕にも居る。

幼い頃に良く遊んだ相手が居れば幼馴染だ。殆どの人が居るだろう。相手が異性であるという事も普通にあると思う。当然だ。

だが歳を取っても相変わらず仲良くお互いの家に遊びに行ったりするととなると、その数は減ると思う。異性の幼馴染が毎朝起こしに来てくれたり、世話を焼いてくれるなんて事は漫画か小説かゲームの中だけだ。全く羨ましい限りである。僕がそんな立場なら、毎日神への感謝を忘れないだろう。ましてや過去にフラグを立てていて、相手がずっと自分に恋心を抱いているなんて事が起こりえるはずが無い。

しかし世の中どんなきっかけで何が起こるかわからない。

僕は椅子に深く腰をかけ半眼で目の前の光景を眺める。とある薄暗い部屋で数段高い位置にある玉座に座り両脇に女性を侍らせている。そして目の前には数十人の黒尽くめの集団がいた。何でこうなった今にも「イーツ！」とか言い出しそうな集団を前に自問自答する。

昨日の夜まではいいつも通りの日常だった。今朝も変わらない朝だったと思う。いつもは白味噌なのに赤味噌だったのが原因か？もしかしたら何かの前兆だったのかもしれない。だとすると「赤味噌もなかなかイケルナ」等と思っていた朝の自分を殴りたい。味噌汁の所為であるはず無いけど。

今日は僕の誕生日だ。18歳になった。飲酒喫煙は出来ないとしてもある程度大人扱いされる歳となった。結婚も出来るし18禁ゲー

ムも堂々と購入できる。堂々と購入する勇氣は無いが。この誕生日が要因の一つだったのは間違いない。

「赤味噌もなかなかイケルナ」と呟きながら朝ごはんを食べてたら呼び鈴が鳴る。家の誰かが対応する前に玄関が開き幼馴染が入ってきた。

「裕也、誕生日おめでとう！」「おめでとう」「そう言いながら入ってきたのは2人の女の子だ。

一人は長い髪を人括りにしたブレザー姿の元気な瑞貴。

もう一人は同じく長い髪をそのままにしたセーラー服姿の静かな環。どちらも幼馴染だ。この事に関しては神に毎日感謝しても良いと思う。

小さな頃から家族ぐるみで付き合いがあったため、良く3人で一緒に遊んだ。そしていつも僕が”被害”を受けていた。この歳になっても。

一番多い被害は「自称恋敵」による闇討ちだ。瑞貴はその活発な性格から、環は物静かな性格からそれぞれに人気がある。見た目は可愛いから仕方ないとは僕も思う。

ただ問題なのは告白を受けた際の断り方だ。最初は普通に「付き合いえない」と言うらしいのだが、それでも食い下がる相手に面倒になつて「裕也と付き合ってるから」と断るらしい。

本当に付き合ってるなら本望だ。だが実際はそんな事も無く、ただただ面倒だから僕の名前を利用してに過ぎない。そんな事で月に一回以上闇討ちされるのは勘弁して欲しい。僕は何か武道を心得ているという訳でもないので毎回逃げるのみだ。お陰で持久力だけはついた。

そして何より困るのが二人とも同じ言い訳で断る為に、瑞貴と環に二股を掛けているという疑惑である。その所為で闇討ち率が上がり、女の子に「最低」と敬遠される。無実の被害で彼女を作る機会がゼロになっているのだ。

これだけでも[±]でマイナスとなるだろう。毎日神に祈るどころか毎日神が祈りやがれ！

「おめでとう」と言いながら入ってくる二人に「どうも」と言いながら味噌汁をすすする。母さんが「夜まで待てなかったの？」と笑いながら二人にお茶を勧めていた。夜に僕の誕生日会を盛大に行うと聞いている。数日前から準備が行われているらしい。この歳で誕生日会つてとなると思うが、それはただの名目で親達が家族ぐるみで飲み明かしたいだけだろう。丁度明日は日曜なので今日はいつも以上に荒れるかもしれない。

「学校に行く前におめでとうを言っとこうと思って」と瑞貴が言う。2人の制服が違うのは通う学校が違うからだ。僕とも違う。瑞貴はスポーツ推薦で全国クラスの女子校に行った。空手の有段者である。環は頭がすごく良くて名門学校に通ってる。学年主席らしい。そして僕は平凡な公立高校に通っている。

何故学校が違うのに僕の学校の女の子に瑞貴と環の話が知れ渡っているかと言うと、2人が悪目立ちしているからである。二人とも見た目が良い上に瑞貴は空手の全国クラスの選手、そして環は名門学校始まつての秀才との呼び名が高い。目立って当たり前だ。

そんな二人に対して僕も何も思わないという訳ではない。僕も健全男子だ。二人とも別々の魅力で可愛いと思う。だが付き合いが長いとわかる事もある。2人の僕への態度は子供の頃から何一つ変わらない。さすがに一緒にお風呂に入ると言うような事は無くなったが。自分は”そういう対象ではない”という事が分かると急激に冷めるのだ。今の関係を崩したくないというのもある。なので二人に対して僕も”そういう対象ではない”と、いつの間にか思うようになった。可愛いというのは事実なので認めるけど。

朝食も終わりお茶を飲みながら「夜に会うから今言わなくても」という僕に「18だから」と環が言い「そうだよね!」と瑞貴が笑う。18がどうした?と思ったときに母さんが「そろそろ出ないと遅刻するわよ」と声を掛けてきて僕達は急いで家を出る。

「じゃ後でまた」「また」「おう」と声を掛け合い、それぞれの学校に向けて歩きだした。

学校はいつも通りだった。仲の良い友人と「今日誕生日だっけ?」「そうだよ」「まじで!」「おめでとう」「何も無いけどね」という心温まるやり取りが行われたぐらいだ。白状だが他の奴らの時も似たような対応なので仕方ない。因果応報という奴だ。3年ともなるとやはり受験の影がちらつき、まじめな奴らは休憩時間でも参考書などを広げている。僕がどうかは推して図るべし。

放課後になり何事も無く学校が終わった…はずだった。

靴を履き替えて校門に向かうと人だかりが出来ていた。「有名人でも来てるのか?何にせよ校門は邪魔だよな」と人だかりをさけつつ、なんだなんだ?と覗き込みながら通過しようとした所を「裕也」と呼び止められる。

身に覚えのありすぎる声にぎょっとして声のした方を向くと、人だかりの真ん中に瑞貴と環がそれぞれの制服姿で立っていた。僕に向かって手を降る二人にざわめきが広がる。無視することも出来ず「針の筵とはこの事か」と実感しながら二人に近づく。モーゼの十戒の様に人垣が二つに割れて僕と2人の間に道が出来る。

因みにモーゼはユダヤ人と共にエジプトの軍勢から逃げる為に海を

割って逃げたのであって、十戒というのは逃げた後に長い旅を続けた後に神から授かった10の戒めの事だ。
僕は子供の頃に意味を割って逃げた行為を十戒と想ってた。今までの話と全く関係ないけど。

「…どうしてここに？」と僕が聞くと「一緒に帰ろうと思っただけ」
と瑞貴が言う。見ると環もコクリと頷く。それを聞きつけた友人達が「どうも始めまして。裕也の親友してます」と話に割り込んできた。この状況で物怖じしない度胸に驚嘆すら覚える。僕は手短に4人の友人を紹介する。それににこやかに「よろしく」と挨拶する瑞貴と静かに微笑み挨拶する環。

2人の対応の良さに舞い上がる友人の一人が「よければ一緒に帰りましょう」と言う。お前の家は逆方向だろう。「一緒に帰る」と言う単語に周りの生徒にも緊張が走る。あわよくば自分も一緒に帰ってお近づきに、と思っただけなのがある。分かるが女子も食い気味なのはこういう事なの？

友人の申し出に瑞貴が手を合わせて「ごめんね」と言う。「車なんだ」と指差すほうを見ると黒塗りの高級車が止まっていた。何あの高級車！？と混乱する僕を他所に「いこう」と環が僕の腕を掴む。瑞貴が友人達に「ごめんね。それじゃまた」と言い「ごきげんよう」と環が言う。異様な雰囲気にも呑まれたのか、友人を含めた周りの生徒が「ごきげんよう…」と返す。絶対「ごきげんよう」なんて日常会話で使ったの初めてだろう！僕も無い！！

何がなんだか分からないうちに車に環が乗り込み僕が押し込められ瑞貴が乗り込む。ドアが閉まると車は静かに走り出した。

こういう車は初めて乗ったけど3人並んでもゆったり座れるのは、さすが高級車という所なのだろうか。余りの事にどういう感想を抱いて良いかも分からない。

「一体どうということなの？」と僕が聞くと「サプライズ」と環が言

う。「折角だから驚かせようと思ってね。高級車を用意したんだ」と瑞貴が笑う。確かに驚いた。

「高級車には美人なお姉さんが付いてくるのか…」と向かいに座るスーツ姿のお姉さんを見て言う。「そんなわけ無いでしょ!」「羽月さんは秘書。この車の手配をしてくれた」という2人に「なるほど秘書か」と頷く。確かに秘書っぽい。落ち着いた雰囲気と黒スーツが秘書っぽいというか葬式帰り?

そんな僕に「よろしくお願いします」と頭を下げる羽月さんに「初めまして。こちらこそお願いします」と頭を下げる。何をお願いするのかは分からないが、初対面の挨拶などそういうものなのだ。羽月さんは少し笑うと「昔にあった事があるんですよ」と言った。

「10年前くらいによく家に来てたじゃない」という瑞貴の言葉に記憶を探るが思い出せない。「私も覚えてる」と環が静かに言い「裕也は羽月さんと結婚するって言ってた」と言った。そんな事を言ったの、僕!?

羽月さんは「正確には12年ほど前ですね」と言うと「4番目の奥さんにしてくれると言いましたよ」と笑った。言ったんだ!というか4番目って他に3人もいたの??

聞くと1番目は母さんだったらしい。それはそれで死にたくなる答えだ。2番は2人居て瑞貴と環だったらしい。「2人は一緒だから!」という理由だったらしい。子供の頃の僕って、ある意味すごい。そして死にたい。

「すみません…よく覚えてません」と言うと羽月さんは笑って「小さい頃だから仕方ありませんよ」と言う。

秘書なのも昔に逢った事があるのも分かったが、どうしてここに羽月さんが居るのが良く分からなかった。それが顔に出ていたのだろうか。羽月さんは「私はお父様の秘書でした」と言った。

父さんは警備会社を運営している。そしてその重役として瑞貴と

が好きである。面白いから別にいいんだけど、こういうホテルでやるのはどうよ？瑞貴も環も羽月さんですらスルーしている。まあホテル側が許可したのでやれてるんだろうけど。

通路の奥に行くと瑞貴が「じゃ後で」と僕に言った。後で？と聞くと今から着替えるそうだ。瑞貴と環が同じドアの中に消える。「此方へ」という羽月さんの案内で向かいの部屋には言った僕に「此方の服に着替えてください」と羽月さんが僕に着替えの服を渡してきた。

「これって…マント？」渡された服を着替えながら羽月さんに聞く。「マントです」「ですよ。コレも着るんですか？」「総統ですから」「どうやら服装まで凝るらしい。というか全身黒い服は別にいいただ黒尽くめの上に黒マントというのはどうなんだろう。中が赤いけど外と中の色を入れ替えたほうが…黒尽くめに赤マントも変か。しかしどう止めるんだ？」と思ってたら羽月さんが止めてくれた。いい匂いにドキドキする。

着替えが終わると「参りましょうか」と羽月さんが僕を促す。なるほど。黒スーツは秘密結社を意識していたのか。宴会場の扉の前たつ。中から声が聞こえるので式は既に始まっているようだ。扉が開くと僕にスポットライトが当たる。周りが暗くスポットライトが眩しい為に出席者の顔が一切見えないが、拍手の音から結構な人数が居る事が分かる。というか何なの？誕生日会という名の飲み会に何人來てるの？

羽月さんの案内で主賓席に連れて行かれる。見ると「ザ・玉座！」というような椅子が鎮座していた。鳴り止まない拍手の中、椅子の前に立たされると「お忙しいかお集まりいただき、ありがとうございます。暗くてよく見えないが近くに居るらしい。」と父さんの声が聞こえた。

「皆様のご協力のお陰で我が組織もここまで大きくなりました」なんだ会社の人達なのか。「色々困難な状況にも耐えここまでやって参りましたが、この度、息子が18になるのを機に組織の運営を譲り、コレからは若い世代に頑張ってもらいたいと思います」ええええ！会社経営を僕に！？まだ高校生だよ？父さんの発言に会場から盛大な拍手が送られる。

父さんが暗がりからスポットライトの中に入ってきた。その姿は僕の格好そっくりだ。そして僕の横に立つと「後は頼むぞ」と手にした細い剣を差し出した。呆然とそれを見つめていたが父さんの顔に浮かぶ真剣な表情に冗談ではないと悟る。そこまで僕を買ってくれていたとは…家業を継ぐ事なんか全く考えてなかったけど、そこまて言われて拒否をするほど親不孝ではないつもりだ。僕は「微力をつくします」と言うのと剣を手に取った。ん？剣…？さらに盛大な拍手が会場を包む。父さんは頷くと「これからはお前の席だ。座りなさい」と玉座を手で指した。

僕は「ここまで凝った趣向は初めてだな」と思いながら頷くと、マントが邪魔にならないように払ってから座る。すぐに羽月さんが来ると「剣は此方へ」と剣を受け取ると玉座の横に立てかけた。座る時に邪魔で仕方なかったので「ありがとう」と言うと目礼だけして下がっていった。するとすぐに部屋に明かりが薄く入る。何で全部明るくしないんだ？という疑問よりも、その部屋の状況を見て僕は驚きに心臓が止まるかと思った。

黒！

何がって人がだ。2〜300人くらい居るような大広間に並ぶ人たちが全員黒い。黒いスーツとかそういうレベルじゃなく、全員が黒マスクまで着用しているのだ。「秘密結社」という言葉が頭をよぎる。どうやら会社の社員一同もこの冗談にのっているようだ。その徹底振りにも驚くが、2〜300名の黒尽くめの集団が整列してい

ると言う事に驚きだ。学校の全校集会で上から見たらこんな気分なのだろうか？

僕が固まっていると羽月さんが司会進行を始めた。部屋がまた薄暗くなり羽月さんと僕だけスポットが当たる。

「裕也総統の2代目就任に合わせまして、最高幹部も新しく3名就任する事になりました」2代目ってアレだね。組み関係の方っぽいよね。「科学部門、環総帥」って環！？見ると扉が開きスポットが当たると全身黒尽くめの環が入ってきた。なんというか白衣ならぬ黒衣？長い黒髪と相まってかつこよく見えるけど、良く環がこんな茶番に付き合ったな。環は僕の席の所まで来ると僕に向かって膝を折る。何なのこの儀式。僕はどうしたら良いの？

「戦闘部門、瑞貴総帥」瑞貴も！？スポットライトを浴びた瑞貴はへソ出しといより「上半身は水着だけです」といういでたちで、下半身はさすがにズボンを履いているが、女王様的なコスチュームにマントを羽織っている。同じように僕の前まで来た瑞貴は悪戯っぽい笑顔を見せると膝を折った。

羽月さんが僕の所に近寄ってくる。そして「これをお渡しください」と言つと杖を渡してきた。それを受け取ると環が立ち上がる。環に渡すのね。僕が杖を差し出すと環は黙って僕を見つめるだけで何も言わない。何でだろう、と思つて先程の父さんとのやり取りを思い出す。「よろしく頼む」と言つと「仰せのままに」と言つて受け取った。盛大な拍手が鳴る。

そして今度は鞭を渡される。鞭いいい！？すぐに瑞貴が立ち上がる。えっと…鞭なんかでいいの？瑞貴が面白そうにしているので良いのだろう。環と同じ言葉では芸が無いと思いつながらも「宜しく頼む」と言つて渡すと「わが身果てるまで」と言つて受け取った。さらに盛大の拍手が響く。何てノリの良い人達だ。

会場がまた少し明るくなる。瑞貴と環は僕の両脇に控えている。羽月さんが僕の父は総統を僕に譲つて最高幹部の一人として組織の

運営を手伝っていく事が告げられる。さすがにいきなり会社経営を任せられたりしない様でほっと胸を撫で下ろす。どんな事をするのかも分からないのにいきなり経営トップとか無理だしね。そして今までの最高幹部も引き続き最高幹部として新しい総統を支えていく事が告げられる。見ると僕の母さんと瑞貴、環の両親が最高幹部だった。とうか環の母親が前科学部門総帥で瑞貴の父親が前戦闘部門総帥だった。そもそも戦闘ってなんだ？

その後、各自自由に飲食を楽しむ歓談の時間が取られ、その間に祝電が読み上げられる。

「新総帥就任おめでとうございます。しかし世界征服は我々が行います。西日本秘密結社連合会長様」世界征服！と言うか西日本って！！「新総帥就任おめでとうございます。新しい兵器がご入用の際はお声をおかけ下さい。巡航艦ミサイルまででしたら当日手配します。デヨポソ社社長様」まで”って何？何基準の”まで”なの？「新総帥就任おめでとうございます。お前達の野望は俺が潰す！五色戦隊代表あずき様」秘密結社の総統就任の祝電にヒーローからとか。というかリーダー小豆色って他の4色何色だ！！その後は名前だけが読み上げられる。どの人もバラエティに飛んだ名前だ。後でどういう文面か読ませてもらおう。

やはり何故か薄暗い室内に黒い集団が動き回っている。会話…しているのだからうけど、小声で話しているようなので静かで会場が若干不気味である。僕の横に立つ瑞貴と環に「座れば良いのに」と言うがどちらも「そんなに長い時間じゃないから大丈夫」と首を横に振る。「環の杖は分かるけど、瑞貴は何で鞭なの？」女王様スタイルだからか？「秘密結社の女幹部は鞭だから」と納得するような、したら負けのような複雑な気分だ。「風引くなよ」と言うと「マントは以外と暖かい」と笑った。まあマントを羽織って立っている限り

は上半身も殆ど隠れるので良いか。

僕もノンアルコールのシャンパンを飲みながら玉座にひじを付き頭を支え足を組んでみる。何か本当に秘密結社の総統っぽくない？と聞いたら「悪そうだね」「なかなか」という反応が返ってきた。この場の雰囲気、地味に薄暗い感じや全身黒尽くめの社員さん達の「黒尽くめはしゃべらない」という感じの役作りを見やり、そして周りに美人幹部を2人侍らせている状況に本当に秘密結社の総統になったように楽しくなってきた。

「何かここで秘密結社の新総帥らしく、ババンと何か言っちゃおう？」と僕が言うと環と瑞貴が「いいね！」「ごー」と言う。だが言うとなるとインパクトのある事が言いたい。ん〜と考えた僕に2人が「世界征服とか言っちゃおう？」「いつっちゃおう？」と言う。ありきたりだな。まあでもそんな事くらいしか言う事無いしね。

僕はゆっくりと立ち上がる。その動作だけで静かになり皆が僕に注目する。僕はマントをバサーっと払うと「宣言する！！」と叫んだ。「いいね。ノリノリだ」「ノリノリ」と楽しそうな2人の声が僕を後押しする。「僕が総統になったからには、この組織を世界最大の組織にしてみせるっ！！」左腕を前に突き出しどや顔を決める。僕の言葉に会場が一瞬ザワツつとしたのを感じ、意表をついた事に満足すると僕はマントを払い腰掛ける。

言葉、いや身動き一つ無い会場に「あれ？」と思う。ハズシタ？恥ずかしい気持ち湧き出す直前に瑞貴の声がかすかに響く。「それが…どういう事かわかっているの？」うん？言葉のままだけど？「そう…」環が頷くと瑞貴が一步前に出て宣言した。「総統の言葉を賜った！邁進せよ！！」その言葉に全ての人が姿勢を正す。

あ…あれ？何この雰囲気。

瑞貴が「裕也の…總統の気持ちは分かった。私もその野望が叶えられるよう全力を尽くす。」と言い「組織に全てを捧ぐ」と環が言う。え？あれ？”世界最大の組織”というのは世界征服より難しい事よ」「どういう事なの？」「世界征服はただ各国に負けを認めさせ服従させるだけ。でも世界最大の組織は他の組織を潰すか吸収しないとだめ」環の言葉に僕は言葉を詰まらせる。何でそこまで真剣に捉えているの？「總統の言葉は絶対」「裕也の言葉で全員の緩んでいた気持ちが引き締まったわ」「2人が僕に頷く。いや、全然分からないから！

2人が言うには僕たちが、せめて大学を卒業するまでの数年間は僕たちが組織の運用を覚える準備期間として秘密結社もまったり活動する予定だったらしい。だが今さっきの僕の言葉によりそんな甘えは必要なく、すぐに野望に向けて動き出すという言葉が下ったのだ。

「大丈夫よ。ここに居る皆は組織と總統に絶対の中世を誓ってるわ。もちろん私達も」「途中で倒れる事があっても野望を実現させる覚悟は出来てる」「2人の言ってる意味が分からないよ。」「当面は警備会社としてのみ動く予定だったけど、早急に準備を始めないとダメね」「大丈夫怪人なら数体用意できている」「なら近日中に動けるわね。明日にでも会議を開いて方針を決めましょう」「どんどん話が進んでいく。じゃ無くて怪人！？ネタだよね？

2人の話を纏めると「警備会社」というのはダミー会社のようだ。そして秘密結社と言うのは本当に僕の2代目總統就任と瑞貴や環の就任はおろか、父さんが前總統で母さんや水木と環の両親が最高幹部なのも本当らしい。そして秘密結社は悪の組織のようだ。大抵の悪事はするらしい。怪人も実戦配備可能らしい。だから怪人って何だ！

今までの話が本当なら祝電の「西日本秘密結社連合」とか「デヨポソ会社」あまつさえ「五色戦隊のリーダーあずき」も本当にいるの！？いや、他の色が判明しそうで嬉しい気もするけど、なら本当にヒーローに新総統就任が筒抜けって秘密結社としてどうなのさ！！というか正義のヒーローの他にも別の秘密結社とも戦わないとダメなの！？

自分の発言の重さに今更ながらに気が付いた。ただもう「さっきのはウ・ソ！」と言えるような状況ではない。

僕は椅子に深く腰をかけ半眼で目の前の光景を眺める。とある薄暗い部屋で数段高い位置にある玉座に座り両脇に女性を侍らせている。そして目の前には数十人の黒尽くめの集団がいた。今にも「イーツ！」とか言い出しそうである。

その中の一人が手を足を「タン」と踏み鳴らし、右脇をあげて指先をまっすぐに胸の当たりから斜め上に振り上げながら「いーっ！」と言った。というか言った！！色々大丈夫か！？すると周りの黒尽くめもタイミングを合わせたように足を踏み鳴らすと一斉に「いーっ！」と言った。

すごい。色々突っ込みたい事はある。何故「いーっ！」としか言わないのか。それで意思疎通が出来るのか？そもそも何でこんな組織に忠誠を誓っているのか？だがそんな事よりも統率された動きに恐怖を覚える。この人達の上に立つの？悪の組織の総統として？悪事を働くの？？そんな事が出来るのだろうか？そもそもどんな事をするんだ？

僕は両脇に控える瑞貴と環を見やる。

どちらかと言えば戦隊ヒーローのピンクのような瑞貴と現実的に物事を冷静に判断する環を見やって、どう考えても悪の秘密結社という想像は出来ない。どうせ大した事は出来ないだろう。

「まずは資金の確保」「そうになると銀行強盗かしら?」「お札は通し番号でバレルから、すぐには使えない」「なら小銭になるのか?かさばるわね」「金塊」「なるほど!金塊ね」「いくつか候補があるので明日決めよう」「どうせなら一回で沢山手に入るほうが良いね」

繰り返される幼馴染の会話に冷たい汗が流れる。冗談…だと思いたい。が、目の前にいる黒尽くめの集団がその思いを打ち砕く。一斉に「いっ!」と叫んで手を上げたまま微動だにしない。疲れなのかな。僕が「そろそろ腕を下ろすように言ったほうが良いんじゃない?」と幼馴染に言おうと手を上げた所、ザツと音がして全員が腕を下ろす。

何か雰囲気的に僕が片手で「もうよい」という身振りをしたように見えたくない。というか絶対に見える!どうにかそんなんじゃないと伝えたいけど、どう伝えたらいいんだろう?

そう考えていたら羽月さんが近寄ってきて「そろそろ退出願えますか?」と言ってきた。この空気に耐えれなくなっていた僕はぎこちなく頷くと立ち上がる。するとまた全員が脇をあけて指先まで真っ直ぐにした手を胸に当てた。アレってこの組織の敬礼なのか!

その事実には驚いて一瞬止まる。そして羽月さんが手渡してきた剣を掴むと急いで部屋を退出する。後ろには瑞貴と環、そして羽月さんが従う。部屋を出て廊下を歩き先程の控え室に入ると椅子に座り脱力する。疲れた…。

続いて入ってきた3人は先程のもくの姿を褒め称えだす。

「あのいきなりの宣言は良かったわね」ただ調子に乗っただけです「そうですね。裕也様の野望の高さが伝わりました」ネタのつもりだったんです「手の振りだけで皆を動かしたのもすごい」それも勘違いです「そうそう!アレは貫禄だったわね」たまたまそう見えただけなんです「最後の退出も素晴らしいと思いました」え?何が?

？「立ち上がった時に敬礼を一瞬待ったのが素敵」逆だから！敬礼に驚いて止まったただだから！！「最後の剣を受け取ってマントを翻しながら颯爽と会場を出る姿もかっこよかったわ」もうやめてあげてよ！

「明日から頑張らないとね」という瑞貴と頷く環。そして「明日は日曜なので昼前にお向かいに上がります」という羽月さんを無表情に見やる。

こうして僕は18歳の誕生日に父親の後をついで「秘密結社の総統」となった。

1 にちめ 「秘密結社」(後書き)

シリアスとは一体なんだったのか？本当に銀行は襲うのか？
そもそも続くのか！？

次回予告

何故戦闘員は「いーっ！」と言っのか？

羽月の過去！？

怪人を作る「魔法の粉」とは！？

ヒーローのジツリキが明かされる…

2 にちめ 「ヒーロー」

僕「羽月さんの過去話がもう明かされるの？」

羽月「隠すほどの事でもないですし」

環「魔法の粉の正体はハ」

瑞貴「ここでいっっちゃダメ！」

2にちめ 「ヒーロー」

「しかし銀行を襲うとなると多少の犠牲は必要となるぞ？」元総統である父さんがしらたきと取りながら言う。「そうねえ。昔にやろうとした時はまだ今ほどセキュリティも万全じゃなかったし、地方の銀行だったしねえ」と瑞貴のお母さんが春菊を投入しながら言う。「言うかやろうとした！？どうやら当時はリスクの方が大きいと判断したそうだ。瑞貴のお父さんが白菜に息を吹きかけ覚ましながらかうそう考えると今はまだ時期尚早じゃないか？」と言う。

しかし瑞貴は「大丈夫！秘策があるの。ねえ環」と端を握り締めて言う。環はちまちまと食べていたお茶碗を置いて頷くと「怪人」と言った。「怪人ってどれ位の強さなの？」と環のお父さんにビールを注ぎながら母さんが聞く。「身体能力は常人の3倍」「ほう」自分の娘の言葉に口をつけてたビールをテーブルに置くと色々質問を始めた。が、専門的過ぎて良く分からないので割愛。

とりあえず怪人、環はヒューマノイドと命名したらしい。そのヒューマノイドの能力は先程伝えたとおり常人の3倍。瞬間的に5倍まで耐えられるらしい。戦闘員が2倍程度であった事を考えると物凄い進歩らしい。怪人の存在すらどうなのよ？というか戦闘員でも2倍ってすごくない？？と思う僕の方がおかしいらしい。味の染みた白菜うまいなあ。

驚愕の就任式の翌日の昼前。羽月さんが僕たちを迎えに来た。しかし母さんの「どうせ幹部は全員ここにいるんだし、羽月ちゃんも来たんだからウチでしましょう」という発言で昼に鍋をつつきながらの会議が始まったのである。

「ヒューマノイドを使えば銀行の金庫の壁など紙同然」「硬さも備えているのか」「警察の銃くらいなら耐える」「硬いな」親子の会

話も固い。そして酷い。

「これで銀行の壁を壊す方法は問題ないわね」が箸を天に突き出し宣言する。え、そうなの？「後はセキュリティの解除と金塊の運搬と逃走方法ね」残りのほうが多いなあ。そもそも最初の銀行の壁も大丈夫かどうかも謎だけどね！

「運搬逃走は大丈夫。怪人は一人で百キロ近い金塊を持ってても理論上は時速100Kで走れる」それってもう3倍とか言うレベルじゃないよね！？「後はセキュリティか天」いやいや瑞貴さん。机上の空論もいい所ですよ。「セキュリティに関してはウチのスタッフは優秀だからある程度なら大丈夫だろう」と父さんが言うと「そうなの！？じゃあもう成功したも同然ね！」と嬉しそうに瑞貴が言うので僕が突っ込む。「いや、ダメだろう！」「どこが？」「何故瑞貴と環は何故不思議そうに聞くのですか？

「まず本当に金庫の壁を壊せるか試さない」と！「本番で壊れませんでした、じゃダメだからね。「それに本当に持ち運べる重さを確認しておかないと！」「私のヒューマノイドは信用無い？」中思想に言う環に「そうじゃないよ」と首を振る。環ももちろん瑞貴も僕は信頼している。だが事は仲間の身の安全に関わる。失敗＝破滅なのだ。「きつと」や「理論上」では実行に移す事は出来ない。実際にどうなのか、をしつかりと確認して「絶対」と言えないとダメだ。そして計画は綿密に。立地や時間的狀況、銀行職員や警察の動き、逃走方法などの何回も手順を繰り返し行いミスが無いようにしなければいけない。

「それだけしてやっと実行段階だ」と言うと瑞貴が「めんどくさい」と言ったが「だめだ」と却下する。父さん達の「確かにそうだな」という言葉で瑞貴も納得した。

訓練は警備会社の敷地内にある訓練場に模型を作り行う事となった。

最初は都内にある一番大きな銀行を狙うと言いはった瑞貴に「いきなりはリスクが高すぎる」と説得し、都内にある強盗に適しているだろう銀行で行う事となった。

まずはその銀行の立地と建物の構造、そして金塊の貯蔵量の調査だ。標的の銀行とその立地や建物の構造はすぐに手に入った。どうやってすぐに手に入れたのだろう。「関東近県最大の組織ですから」と羽月さんが言う。各方面、それなりの所まで手が及んでいるらしい。秘密結社半端無いです。

その情報を元にあつという間に建物が再現され、訓練が始まる。と言うか会社の地下にこんな広い訓練場を持つてるなんて！その事もあの事も色々含めて、秘密結社を舐めていたと言わざるを得ない。

色々な疑問はここで解消しておく。

何故、瑞貴と環はすんなりと受け入れているのか？それは2人が事前に秘密結社の事を知っていたらしい。驚愕の事実である。高校に入っただけに知ったらしい。何故言わなかったし！どうやら示し合わせたようだ。僕を嵌めるために仕込まれていたらしい。すっかりかっきりはまりました。

瑞貴も環も高校入学して知らされた。その時に自分の親の会社が悪の秘密結社という事を知ったのだ。今までやって来た事も聞いた。人身売買系、薬物系以外、殺人以外は大抵したそうだ。自分の親が犯罪者の手段のトップだったと言う事は物凄い衝撃だった。当然である。「無理やりやらせたりはしていない」と言う言葉も信用できなかったが、会社に偽装した秘密結社の実情を見て、戦闘員の皆と話して本当に無理やりではないと分かった。洗脳との違いは分からない。

戦闘員にはいろいろな種類がいるらしい。前線で働く者のと後方支援を行う者だ。そしてそれもそれぞれ2種類に分かれる。秘密組織

の内部の者と、外に生活基盤を構えながら組織の活動に携わるものである。この人達は組織に絶対の忠誠を誓っている。それ以外にも外部に協力者はいるが、その人達は秘密結社の実情は殆ど知らない。ただ利害が一致している部分だけなので、組織名を出さずに行動を共にしているのだ。

それと何故戦闘員は「いーっ！」と言うのか？別に普通に話せる。それ話せなかったら怖い。では何故それしか言わないのかと言うと個性を無くす為らしい。声などで年齢性別などの特徴がバレ無い様にする為らしい。因みに意思疎通はマスクに仕込まれたマイクとヘッドフォンで行うらしい。無駄に高性能である。そしてあの黒尽くめのスーツは身体能力を上げるらしい。詳しくは分からないけど、足を閉めて血行をよくするストッキングのすごい版のようだ。いや指を立てて「すごい版」とか言われても。そんな説明でいいの？構成員の人数はおおよそ500名、準構成員は2000名、協力者多数。思った以上に多い。

そもそも秘密結社と言っているが正式名称は何かと聞いたら「無いわよ」と言われた。秘密結社なのに名前を付けて識別されたらどうするのか、と言うのだ。確かにそうかもしれないが、じゃあ銀行強盗など行っただけいけないだろう。しかし「それはそれ」と返された。警察に捕まらなければどこがやったかわからないし、捕まっても口を割るような人はいないらしい。そんなに忠誠心高いの？捕まったら関東最大のウチが疑われるの確定じゃないかと言うと「ないない」と手を振り瑞貴が笑う。「私達は秘密結社」と言う環。本当に秘密結社なので存在も知られていないようだ。知られた時点で秘密じゃない。そうだね。こういう事件があった場合は、まずはマフィアなどの関与が疑われるだろうのが定石のようだ。

今まで秘密結社はどの様な犯罪行為を行ったのか。

暴走族壊滅、製薬会社令嬢誘拐、麻薬取引現場襲撃、人身売買取引

現場襲撃、闇オークション会場襲撃などを行ったそうだ。いやいや誘拐事件起こして一般人に迷惑掛けてるし！

薬品会社社長令嬢誘拐に関して、誘拐されたのは12年前の羽月さんだったらしい。何で被害者が加害者の秘書なんてやってるの!? 羽月さんを誘拐した理由は、製薬会社を脅して情報を公開させるため。当時、大物代議士数名が幾つかの製薬会社と組んで利潤を上げていたらしい。薬品の認可を下ろすのに手を貸す代わりに多額の裏金を要求していたようだ。一部製薬会社では研究データの改ざんでも行い、それを分かった上で認可を下ろしていた。

「娘の命が返して欲しくば情報を出せ」その要求と共に羽月さんの髪をばつさり切って写真と共に送りつけたらしい。女の子の髪を切るなんて…と思ったら「私が切ってくれるように言いました」と羽月さんが言いました。

どうやら誘拐されてすぐに理由を聞いたらしい。いきなりそんな事を言われた羽月さんは誘拐犯を信じず、ただ震えているだけだった。「誘拐犯：前総統を信じたのは、裕也様の存在があつたからなんですけどね」「ええ!? 僕??」誘拐された羽月さんはすぐに僕の家に来て行かれたらしい。そこで僕と瑞貴と環に会つたようだ。そして僕たちを見て信用できると感じたらしい。そんなものなの?

「まあ拘束されたりしていた訳じゃないですし、監視者が有能でしたから」監視が居たとはいえ、あの家で自由に出来るのなら逃げようはあつた筈なのに。「監視者は若でした」僕!? 「私が離れたりとすると泣き出して大変で」うわ…恥ずい。それで逃げるに逃げれなかつたようだ。

軟禁(と言っていいのだろうか?)は10日程行われた。4日目に自分から「髪を切ってください」と言つた後は気分も落ち着き、楽しい軟禁ライフ(なんだそれは)を遅れたらしい。

6日目に自分の父親が急遽記者会見を開いたのをテレビで見た。多

くの警察関係者と共に会王位亜「羽レア父親は少し疲れた顔をしていた。認可を通す為に大物代議士数名に裏金を出した事と、出さないと素晴らしい効能の薬品でも裏金を渡さないと認可が下りないこと。逆に全く効果が得られない愛や、危険な副作用があるような薬品でもデータを改ざんして裏金を渡せば認可が下りる。そして幾つもの薬品が認可を取る為に改ざんされているという事を発表した。記者会見が余りの事に騒然となる。「事實は本当なのか」「大物代議士の名前は」「どれくらい渡していたのか」「他の製薬会社の名前は」「データが解散されている薬品の名前は」「オタクの会社でも改ざんしていたのか」「なぜいきなりそのような事を発表したのか」などなど。

羽月さんの父親は全てを語った。自分の娘が6日前に誘拐された事。誘拐犯は今語った内容を公表するよう要求し、もし嘘を言ったり一部を隠したりしたら娘の命の保障がされない。誘拐犯が何故、この件に関して知っているのか不明であり、犯人の目星は付いていない。この記者会見開始と共に大物代議士と製薬会社の社長に逮捕状が出て逮捕されている。それには自分も含まれる事。この後、警察から代議士の名前と製薬会社と薬品名が発表される事。そして最後に自分達の薬品は裏金を出したがデータの改ざんは行っていないので、安心して使って欲しいと締めくくった。父親は手錠を掛けられる事無く任意同行という形で警察官と共に記者会見場を後にし、すぐに警察による発表が行われた。

「そんな事が…」「まあその後うちの会社では改ざんがなかった事と、私が誘拐され手居たとは言え事実を公表した事を考慮して、父は系を減刑されましたけどね」代表取締役を辞任（退任扱いはされなかった）はした。世間も同情的で羽月さん家族は犯罪者一族と言っ扱いはなく、逆に政治と薬品会社の暗部にメスを入れる状況を作った人として脚光を浴びたそうだ。「その後は幾つかの製薬会社の顧問なんかやってます」と羽月さんが笑った。

発表から4日後に羽月さんは解放された。すぐ開放されなかったのには理由がある。一つには事件発覚による暴徒が羽月さん家族に危害を加える可能性があった為。情報操作で羽月さんの父親を勇気ある人として祭り上げるのに4日程掛かったらしい。というか4日で出来てしまっつてどうなの。「メディアを誘導できれば簡単ですよ」いや、それができる事がすごいんですけど。「すごいんです」と自信満々に羽月さんが言う。発表したにも拘らず4日間も帰らない羽月さんに、さぞやきもきしただろうと思ったら、事前に4日間は帰さないと伝えていたらしい。

そして誘拐から10日目に誘拐犯から最後の連絡で羽月さんは某県境の廃棄冷蔵庫に入れられている事を知らせたらしい。その時に羽月さんは薬品で眠らされたらしい。警察の取調べに「食事とトイレやお風呂以外は薬品で眠らされていた。目隠しは常時されており、人数は分からない。ただ自分の世話をしてくれる人は女性だった。移動は眠らされていたのでわからない」とだけ伝えた。警察関係者に聴かれた時にそう答えるように言われたらしい。しかも自分からは何も話さず聞かれた事だけ言葉少なく言うのが本当っぽいと言う事で、開放の前日には質疑応答の練習もしたようだ。そこまでやったのか…。

そんな羽月さんがどうやって秘密結社とコンタクトを取り、秘書になるまでに至ったのか。下人はまたも僕だった。「裕也様は小さい頃から聡明で、名前と住所を聞いたらちゃんと答えてくれましたよ」うん。僕は悪くないよね。逆にちゃんと覚えている事が偉いよね！その住所をしっかりと覚えていたようだ。しかも警察には絶対に言わなかったし、どこにも書いたりしなかった。毎日毎日心の中で復唱して忘れなかったらしい。すぐに会いに行くと疑われる。だから数年間、大学に入学するまで我慢した。そして大学生になってやっと向かった。

覚えていた住所の場所に行くまで物凄く緊張したらしい。もしかし

たら子どもが言う事なので間違ってるかもしれない。もう住んでいないかもしれない。それでも数年間、調べる事すらせず我慢した。そして家の前にたった時に震えた。あの時見た窓の外の風景があったからだ。そして意を決するとインターフォンを押したのだ。

玄関を開けたのは僕の母さんだっただけ。あの時と変わっていない母さんを見て泣きそうになった。だがいきなり来たはいいが何かから話したらいいか分からなかった。そんな羽月さんを見た母さんは「あら、久しぶりね」と言うとき家へ上げてくれた。自分を覚えてくれていた事に嬉しくて泣き出してしまふ。その後、連絡を受けた父さん達が帰宅し話をしたらしい。

どうしてここが分かったのか、何故通報しなかったのか、何故今になって来たのかなど羽月さんが説明する。「どうしても私も一緒に働きたいんです！」そう熱弁する羽月さん。両親達は自分達が「悪の秘密結社である」と犯罪者集団である事を伝えた。それでもどうしても仲間になりたいと言う羽月さんに両親達も折れた。すぐに行動に移さず情報を残さず自分の心の中にだけ留めた事を評価したようだ。とりあえずは表の警備会社の秘書見習いとして父に付く事となった。

「羽月さんはどうしてそこまで……？」と聞くと「内緒です」と笑顔で言った後に「ただ楽しそうだったからですよ」と言った。それだけで来る羽月さんもどうだけど、それを受け入れる親達もたいがいだ。ただそういう経緯で羽月さんは秘書を始めたようだ。「そして小さな裕也様に求婚されたんです」何か色々すみません。

暴走族壊滅、麻薬取引現場襲撃、人身売買取引現場襲撃、闇オークション会場襲撃ねえ。羽月さんの誘拐自体は事態はどうかと思うけど、それも不正を暴く為だとしたら一概に「悪の秘密結社」とは言えないのではないだろうか？しかし「それは違う」と環が静かに言う。「私の誘拐は大物政治家の悪事を暴きだす為のものでしたしね」

「その大物政治家は組織に不利益になると判断され排除された。もっと酷い政治家は沢山要るけど、組織の役に立つから放置している」環と羽月さんの顔をまじまじと見る。他のも邪魔者の排除や敵対マフィアの勢力を削ぐためらしい。「それに麻薬取引現場は物理的に排除した上で、現金は持ち逃げしてるしね」と瑞貴が笑う。暴走族の壊滅も人身売買の取引も闇オークション襲撃もマフィアの資金源を潰す為に行ったらしい。まあ人身売買に関しては前総統である父が気にいらなかった、と言うのも大きな要因の一つらしいが。「だから純粹な正義の味方などでは無いですよ」という葉月さんの言葉に納得するしかない。

ヒューマノイドの人と会った。見た目は普通の…戦闘員姿だった。見た目は戦闘員だが特殊なスーツを着ているのか？と思っただら中の人が特殊らしい。なのに何故戦闘員服なの？「見た目は変わらないから」と環が言う。将来的には見た目も変わるようにしたいらしい。いやいや、人辞めてますよ？それ。「今も十分辞めてますけど」と笑うヒューマノイドの一人。笑ってていいの？

何がそこまでこの組織に忠誠を誓わせるのか聞いてみた。「私は孤児なんです」とヒューマノイドの一人が言い、他の何人かも人達も頷く。秘密結社の運営する孤児院で育ったらしい。それって子どもの頃から孤児を集めて洗脳しているのでは、と思ったがヒューマノイドの人が首を振る。「殆どの子どもが秘密結社の存在を知る事無く、大きくなって社会に出て言ってますよ」そういう人達は秘密結社の存在は知らず、そのまま一生を過ごすらしい。自分達も直前まで知らなかった。

そもそも園の支援者が秘密結社のダミー会社である警備会社である事すら知らなかったらしい。大きくなってその事を知って恩返しがしたくて警備会社への就職を希望したらしい。それは…入ったら秘

密結社で驚いた事だろう。「普通の警備会社でしたよ」警備会社は本当にやってるんだ!?「やってますよ」マジですか。「マジです」警備会社は本当にある。ちゃんと警備の仕事を行う普通の会社だ。この上の地上の部分は全て普通の警備会社だ。地下にこんな秘密結社の施設があると知らずに働いている人もいる。大抵は秘密結社の人間だけど。隠れ蓑としても使用しているのである。もちろん全ての戦闘員が孤児院出身者ではないが。

銀行襲撃の訓練はひたすら反復を繰り返す。最初こそ手順の確認や状況確認でゆっくり行っていたが、2回目からは実戦を想定したモノとなる。

車から降り立った戦闘員は無言で銀行の壁に張り付く者と左右の道を見張るものに別れる。銀行の壁に張り付いた者はそこで待機。20秒の壁を破壊する”時間”を待つと、開いていた壁の穴から中に突入し制圧。すぐに地下へ続く道の前の格子を、という所で「ブー」という警告音が鳴る。幾つかの箇所をポイントと決め、そこを所定の時間内でクリアー到達、出来ない場合や一人でもミスが出た場合は最初からやり直しである。再度、今の箇所や時間短縮と手順の再確認と行くと、車に乗り込みなおし再スタートとなる。

犯行の時間的猶予は逃走も含めて7分。銀行の壁を破砕した所からカウンタが始まる。警報や監視カメラの類は技術班が向こうにする。もしそれが失敗して警報が鳴った場合はその場で撤退となる。銀この壁を破砕してから約2分が物音を聞きつけた誰かが警察に通報する最短の時間である。そこから警察が現場に到着するのに約6分。約8分の間に仕事を終わらせないといけない。

壁に張り付きヒューマノイドが壁を破砕。室内に突入する。営業時間外の深夜を狙う為人は居ない予定だ。そのまま銀行の地下に続く入り口の前の電子キーの付いた格子をヒューマノイドが切断。ここ

までで30秒。そして通路を抜けて金庫の壁をヒューマノイドで破壊。ここまでで2分30秒。金塊の保管されている棚を破壊して金塊を取り出す。3分。ヒューマノイドが金塊を袋に詰めて4分30秒。そのまま銀行を出で6分。そして車に乗り込み逃走する。

警察無線を傍受し近くに巡回の警察が居ない事も確認をする。しかし不測の事態で警察が駆けつけるのが早い場合、ヒューマノイドが警察の足止めを行う。そして仲間の逃走時間を稼ぐのだ。ヒューマノイド単体なら警察ごときには負けないらしい。本当に大丈夫なのだろうか？「日本の警察は基本的に警告無しで銃殺できないから大丈夫」ホントか？

「ヒーローが来た場合は？」僕は就任式の際の電報を思い出して言う。「ヒーローに関しては特に問題視してません」羽月さんの言葉に「それで大丈夫なの？」と聞くと「ヒューマノイドが居る状態では敵ではありません」と言う。

ヒーローと言うのは一般人の有志の団体でヒーローに憧れていたたり、ただ正義感が強すぎるだけの人の集まりらしい。「国の機関とかじゃないの？」「その場合は警察か自衛隊に組み込まれてますよ」確かに。ヒーローもどういった組織でどれ位の規模かは不明らしい。だが秘密結社程の資金源はそうそう無いので組織の規模も大きくなく、人数も少ないらしい。犯罪に手を染める事は立場上出来ないし、しない。そしてヒーローも世間に正体を晒すわけには行かない。そのため出資者を募るのが大変なのである。「何故晒したらダメなの？」「ヒーローはあらゆる悪の敵なので、正体を知られると命の危険もあります」秘密結社以外にもマフィアとかも敵になるらしい。ヒーローはハイリスクノーリターン。趣味の世界と変わらない。

正体を隠して活動する者たちである。よっぽどの実績が無いとどこも出資してくれるわけも無い。実績があっても姿を借りた偽者が横行する事もある。というか秘密結社やマフィアが偽者でお金を騙し

取ったりするので、なかなかヒーローには出資者が付かないのである。過去に倒したヒーローはどこぞの村の青年団だったと言う事もあった。村おこしかよ！

ヒーローはあくまで「正義の味方に憧れる有志の一般市民」である。だがそれなりに体も鍛えていたり腕に覚えがある者が多いので戦闘員との戦いになると良い勝負となる。ただ戦闘員は通常の2倍近い力を持つので最終的には勝てる。では何故良い勝負なのか？それはヒーローは「警察が来るまで耐えたら勝ち」だからである。なんとこの消極的ヒーロー。しかしヒーローにはそれ以外の戦い方は無く、足止め、もしくは時間稼ぎが関の山である。

そこにヒューマノイドが登場するとただの人間に止める事など出来るわけが無い。刃物や拳銃などを所持したら銃刀法違反でヒーローも捕まる。武器も持てないの！？「国がヒーローの武器の携帯を認めるとは思えません」ヒーローは”勝手に”悪と戦う一般市民である。一般市民に武器の携帯を簡単に認めたら大変な事になる。一般市民の誰でも武器が持てる社会。マフィアの一人である一般市民も堂々と武器を持ち歩けるようになるのである。空恐ろしすぎる。だからヒーローは己の身、もしくは警防程度の装備しか持てない。だからヒーローといってもテレビ番組のような力は無い。現実と言う奴は色々厳しい。

だからこそ本来はマフィアなどはヒーローの存在など歯牙にも掛けないのだが、たまに暴走したヒーローが噛み付く事もある。その場合、痛手を蒙るのはマフィアだ。昨今は法改正で動きにくくなりつつある。かと言って向かってくるのを放置すれば面子に関わる。しかしやりすぎると警察が介入してくる。そうするとややこしい事になる。だから目立つヒーローは出る食いが撃たれる。ヒーロー報われなさすぎ。

破れたヒーローは悲惨である。組織によって対応の違いはあるが、

ウチはヒーローの正体の証拠を押さえて脅し、情報を聞き出す。基本的には「自分はどうなっても仲間が売らない」と皆言うが、自分はどうなっても良くて家族はさすがに違うらしい。家族や恋人をちらつかせると過半数は話し出す。さすが秘密結社、黒い。聞き出した情報を元に徹底的に潰す。と言っても殺しはしない。もうヒーローごっこが出来ないように脅すのである。身寄りの無い独身ヒーローには異性のを宛がう。ナニソレ、色仕掛け!?「自由恋愛ですよ! いやいや恋愛って!

宛がうと言うのは単に担当を異性にするだけだ。その中で互いに愛情が芽生え、結婚した者も居るらしい。まじですか!「ウチの組織への再就職率100%」ハニートラップすげえ!

「因みにあの人も元ヒーロー」と環が指差したのは、さつき挨拶したヒューマノイドの一人である。もう何に驚いていいのか分からない。

警察にはヒーローが居ないらしい。「そういうのは機動隊とかがやる」ヒーローとかわざわざ作る必要も無い。作るとしたら警察への人気集めで作る程度だろうと言う。そういうものか。

ヒューマノイドの力が警察や他のマフィアも使い出したらどうなるのだろうか。

だが「大丈夫」と環は自信満々に言う。「そう簡単に出来る技術ではない」だが本当にそうなのだろうか?人が思いつくことを別の人が思いつかないわけは無い。それにヒューマノイドも無敵では無い。一人でも捕まれば研究機関で研究されるだろう。

だが「大丈夫」と自信満々に頷く。「生命活動の停止時に自爆するいや、大丈夫じゃないから、それ!」冗談「笑えないよ!!ヒューマノイドは体に特殊な因子を入れる。それはただ体内に入れるだけでは意味が無く、数時間で因子が瓦解してしまうらしい。因子があるうちは強い力を得るが、因子が瓦解して普通の体に戻ると今まで

の負荷が体に掛かって大変な事になるらしい。その因子を定着させるには因子を体に入れて1時間以内にとあるクスリを服用しないといけないらしい。そのクスリも数時間で対外に出てしまい残らないので、絶対にばれる事は無いらしい。

「でも定着させるクスリも調べればすぐに分かるのでは？」「それは無い」絶対の自信があるらしい。そもそも因子に気がつけるかどうかも分からないレベルであり、通常の因子と定着後の因子にも違いが無いという。何て都合の良い安心設定！「そして自爆」嘘なんだよね！！

「一体どんなクスリ使ってるんだ？」「内緒」でも…と環が「特別に使われている粉の一つを教える」と謎の粉の入った袋を差し出した。これが…で、見せられても良く分からない。「舐めてみると良い」「怪しいクスリじゃないんだろうな？」「おいしい、ただし中毒性あり」怖いよ！「あ、私も欲しい！」と瑞貴が袋に手を突っ込むと指に付いた粉を舐めた。「おいしい！」「だ…大丈夫なのか？」「何が？」「その粉」「当たり前じゃない」「中毒性は？」「まあおいしいから沢山欲しいけど、少しならそこまで無いよ」と笑う瑞貴の言葉に僕も袋に手を居れ指先に粉をつける。そして恐る恐る舐める。ペロ…こ、これは…ハッピータン！？「魔法の粉」確かにそうだけど、冗談だよな？

首を傾げる環。まさか本当にこれが薬の成分なの？「苦い薬もこれで飲める」錠剤にしろよ「それは盲点」お菓子の粉混ぜて飲むほうが盲点だよ！！「子どもも安心」大人しか飲まないだろう「大人も安心」うん。もうそれで良いや。

瑞貴もそうだが環も言ってる事が本当か嘘か判断に困る事をよく言う。僕の反応を見て楽しんでるようだ。ツツコムのがダメなのだろうが、18年それで来たのでついつい体が反応する。

とりあえず、ヒューマノイドはそうそう真似出来る代物ではないのは本当らしい。という事を環のお母さん後で確認出来たのでそれで

2にちめ 「ヒーロー」(後書き)

明かされたヒーローのジツリキと葉月の過去。

驚くべき魔法の粉の有用性！

もっと恐ろしいハニーとラップー！！

色々と明かされる過去や真実に裕也は何を思っているのか？

次回予告

秘密結社の目指すものは？

銀行強盗が決行される。

犯罪行為に対する裕也の出した答えとは！？

3にちめ 「暗部」

僕「組織の目的とか僕の答えとか、最終回っばいですね」

環「もうちよつとだけ続くんじゃない？」「」

羽月「本当は1話から3話の途中まで一気に書いたらしいですよ」

瑞貴「でも途中で展開が気に入らなくて止まったままなんですよ？」

僕「色々とメタい発言は控えようね」

環「ヤンヤンつけボーおいしい」

瑞貴「私も頂戴」

羽月「懐かしいですね」

僕「みんな自由でいいなあ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0164y/>

（株）秘密結社

2011年11月16日02時08分発行